2012 年度春学期　応用数学（解析）　第１３回

第４部・複素関数論ダイジェスト／　孤立特異点と留数

前回の講義で，

> 領域 D で正則な関数 $f(z)$ について，経路 C が D の内部の閉曲線ならば，$\oint_C f(z)dz = 0$ である。

という「コーシーの積分定理」を説明しました。では，閉曲線 C の内側に，関数 $f(z) = \dfrac{1}{z-1}$ における $z=1$ のように正則でない点、いわば「穴」があいている場合はどうなるか，が今回の話題です。

$f(z) = z^n$ の積分

今日の問題のような積分を考えるために，関数を級数で表して，各項に対する積分を考えます。その準備として，$f(z) = z^n$ を，単位円周（複素平面における，原点を中心とする半径１の円周）にそって正の向きにまわって積分した時の値を考えます。

C を単位円周とします。まず，$n = 0, 1, 2, \ldots$ の場合は，円周内で z^n は正則ですから，コーシーの積分定理により $\oint_C f(z)dz = 0$ です。

一方，$n = -1, -2, \ldots$ のとき，あらためて $f(z) = \dfrac{1}{z^n}$ $(n = 1, 2, \ldots)$ とおきます。このとき，$z = 0$ で $f(z)$ は正則ではありません。この場合は，単位円周 C を正の向きにまわる z が $z = e^{i\theta}$ $(0 \leqq \theta < 2\pi)$ と表されるので，

$$\begin{aligned}\oint_C f(z)dz &= \int_0^{2\pi} e^{-in\theta}\frac{dz}{d\theta}d\theta \\ &= \int_0^{2\pi} e^{-in\theta} i e^{i\theta} d\theta \\ &= i\int_0^{2\pi} e^{i(1-n)\theta} d\theta\end{aligned} \tag{1}$$

となります。この積分は，$n = 1$ のとき

$$\oint_C \frac{1}{z}dz = i\int_0^{2\pi} d\theta = 2\pi i \tag{2}$$

となり，$n = 2, 3, \ldots$ のときは

$$\oint_C \frac{1}{z^n}dz = i\left[e^{2(n-1)\pi i} - 1\right] \tag{3}$$

で，$e^{2(n-1)\pi i} = \cos(2(n-1)\pi) + i\sin(2(n-1)\pi) = 1$ ですから上の積分は 0 です。

同様に，a を中心とする半径１の円周を C とするとき，

$$\oint_C \frac{1}{(z-a)^n}dz = \begin{cases} 2\pi i & n = 1 \\ 0 & n = 2, 3, \ldots \end{cases} \tag{4}$$

となります。

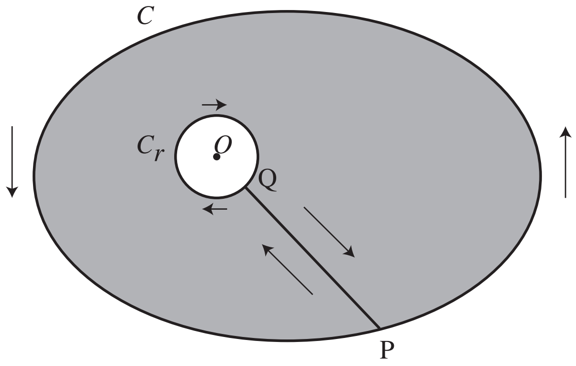

図 1: コーシーの積分公式

コーシーの積分公式

コーシーの積分公式は，領域 D で正則な関数 f の点 z における値 $f(z)$ が，D 内で点 z を囲み正の方向に 1 周する閉曲線 C に沿った積分を使って

$$f(z) = \frac{1}{2\pi i}\oint_C \frac{f(\zeta)}{\zeta - z}d\zeta \tag{5}$$

と表されるというものです。とくに $z = 0$ のとき，C を原点を囲み正の方向に一周する閉曲線として

$$f(0) = \frac{1}{2\pi i}\oint_C \frac{f(\zeta)}{\zeta}d\zeta \tag{6}$$

となります。この公式は，正則関数 f の点 z での値は，z を囲む閉曲線上の値だけで決まってしまうことを示しています。正則関数を「軟らかい板を，ぐにゃぐにゃとどこにも折り目がなく曲げたようなもの」と考えれば，ある点での関数の値が周囲での値によって決まってしまう，というのは，それほど不思議ではありません。

(6) 式の意味を考えるため，図 1 のような，原点を囲む閉曲線 C とその内側で原点を囲む半径 r の円 C_r，それに両者を結ぶ線分 PQ を考えます。関数 $\dfrac{f(\zeta)}{\zeta}$ は原点で正則ではありませんが，P から C を正の向きに 1 周→ $PQ \to C_r$ を逆向きに 1 周→ QP という経路を考えると，この経路は閉曲線で，その内部で関数 $\dfrac{f(\zeta)}{\zeta}$ は正則です。よって，コーシーの積分定理により

$$\oint_C \frac{f(\zeta)}{\zeta}d\zeta + \int_P^Q \frac{f(\zeta)}{\zeta}d\zeta + \oint_{-C_r} \frac{f(\zeta)}{\zeta}d\zeta + \int_Q^P \frac{f(\zeta)}{\zeta}d\zeta = 0 \tag{7}$$

で，$P \to Q$ の積分と $Q \to P$ の積分は打ち消し合い，$-C_r$（C_r の負の方向）に沿った積分は $(-1) \times C_r$ の正の方向に沿った積分 となるので，

$$\oint_C \frac{f(\zeta)}{\zeta}d\zeta = \oint_{C_r} \frac{f(\zeta)}{\zeta}d\zeta \tag{8}$$

となります。$r \to 0$ のとき，上式の右辺は $\displaystyle\oint_{C_r} \frac{f(0)}{\zeta}d\zeta$ に収束し[1]，前節で説明した $\dfrac{1}{z}$ の積分を使うと

$$\oint_{C_r} \frac{f(0)}{\zeta}d\zeta = f(0)\oint_{C_r} \frac{1}{\zeta}d\zeta = 2\pi i f(0) \tag{9}$$

[1]なぜ収束するのかは，参考文献を参照してください。

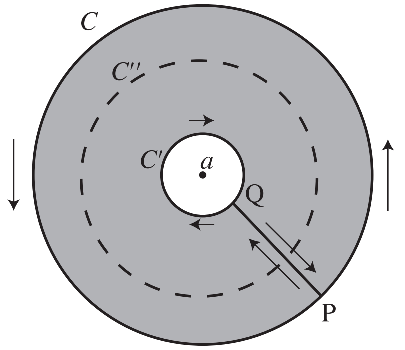

図 2: 孤立特異点とローラン級数展開

となりますから，(6) 式が得られました。これをさらに z だけ（積分経路も含めて）平行移動すると，(5) 式が得られます[2]。

孤立特異点とローラン級数展開

領域 D において，関数 $f(z)$ が 1 点 a を除いて正則であるとき，a を $f(z)$ の**孤立特異点**といいます。つまり，今日の最初に述べた「穴」です。

このとき，a を中心とする円周 C と，その内部にありやはり a を中心とする円周 C' を考え，図 2 のように，P から C を正の向きに 1 周→ $PQ \to C'$ を逆向きに 1 周→ QP という閉じた経路を考えます。すると，経路の内部で $f(z)$ は正則ですから，$f(z)$ をコーシーの積分公式を用いて表すことができます。図 1 と同様の関係を考慮すると

$$f(z) = \frac{1}{2\pi i}\oint_C \frac{f(\zeta)}{\zeta - z}d\zeta - \frac{1}{2\pi i}\oint_{C'} \frac{f(\zeta)}{\zeta - z}d\zeta \tag{10}$$

となります。

ここで，(10) 式の第 1 項の積分の過程では，ζ が外側の経路 C を動き，z は C の内部にあるので $|z-a| < |\zeta - a|$ です。そこで，

$$\frac{1}{\zeta - z} = \frac{1}{(\zeta - a) - (z - a)} = \frac{1}{\zeta - a}\cdot\frac{1}{1 - \dfrac{z-a}{\zeta - a}} \tag{11}$$

と変形すると，右辺の 2 つめの分数は初項 1，公比 $\dfrac{z-a}{\zeta-a}$ の等比級数の和で表され，

$$\frac{1}{\zeta - z} = \frac{1}{\zeta - a}\left\{1 + \frac{z-a}{\zeta-a} + \left(\frac{z-a}{\zeta-a}\right)^2 + \cdots\right\} \tag{12}$$

となります。同様に，(10) 式の第 2 項の積分の過程では，ζ が内側の経路 C' を動き，z は C' の外部に

[2]詳細は，参考文献を参照してください。

あるので $|\zeta - a| < |z - a|$ で，

$$\frac{1}{\zeta - z} = \frac{-1}{\zeta - a}\left\{1 + \frac{\zeta - a}{z - a} + \left(\frac{\zeta - a}{z - a}\right)^2 + \cdots\right\} \tag{13}$$

と表されます。

(12) 式，(13) 式を (11) 式に代入すると，

$$\begin{aligned} f(z) = \cdots + &\frac{a_{-n}}{(z-a)^n} + \frac{a_{-(n-1)}}{(z-a)^{n-1}} + \cdots + \frac{a_{-1}}{z-a} + \\ &a_0 + a_1(z-a) + \cdots + a_{n-1}(z-a)^{n-1} + a_n(z-a)^n + \cdots \end{aligned} \tag{14}$$

ただし

$$a_n = \frac{1}{2\pi i}\oint_C \frac{f(\zeta)}{(\zeta - a)^{n+1}} d\zeta \quad (n = 0, 1, 2, \dots) \tag{15}$$

$$a_{-n} = \frac{1}{2\pi i}\oint_{C'} f(\zeta)(\zeta - a)^{n-1} d\zeta \quad (n = 1, 2, \dots) \tag{16}$$

となります[3]。

ここで，図 2 の円環領域で $f(z)$ は正則なので，コーシーの積分定理により

$$\frac{1}{2\pi i}\oint_C f(\zeta)(\zeta - a)^{n-1} d\zeta - \frac{1}{2\pi i}\oint_{C'} f(\zeta)(\zeta - a)^{n-1} d\zeta = 0 \tag{17}$$

であり，これを使うと，(15) 式と (16) 式を合わせて

$$a_n = \frac{1}{2\pi i}\oint_C f(\zeta)(\zeta - a)^{-n-1} d\zeta \quad (n = 0, \pm 1, \pm 2, \dots) \tag{18}$$

と表すことができます。

関数 $f(z)$ をこのような級数で表すことを，$f(z)$ の孤立特異点 a のまわりの**ローラン (Laurent) 級数展開**といいます。

関数 $f(z)$ と孤立特異点 a について，$|f(z)| \to \infty$ $(z \to a)$ のとき，a を $f(z)$ の**極**といいます。これは，ローラン級数の負のべきの項が有限，すなわち級数が a_{-n} $(n \geqq 1)$ から始まることと同値です（詳細は略)。このとき，a を $\boldsymbol{n}$ **位の極**といいます。なお，負のべきの項が無限に現れるときは，a は**真性特異点**とよばれます。

留数

図 2 において，$f(z)$ を円環部分の中にある円周 C'' に沿って正の向きに 1 周して積分することを考えます。$f(z)$ をローラン級数展開したものの各項を積分すると考えると，今回の最初に説明した「z^n の積分」により，$\dfrac{1}{z-a}$ の項以外はすべて 0 となり，

$$a_{-1} = \frac{1}{2\pi i}\oint_{C''} f(z) dz \tag{19}$$

[3]本当は，ここで「無限級数の積分」を「積分の無限級数」に置き換えられるのは，当然ではありませんが，ここでは詳細は略します。

となります[4]。この a_{-1} を，$f(z)$ の孤立特異点 a における**留数 (residue)** といい，$\mathrm{Res}(a;f)$ で表します。

ここで，孤立特異点 a が n 位の極であるとき

$$f(z) = \frac{a_{-n}}{(z-a)^n} + \cdots + \frac{a_{-1}}{z-a} + a_0 + a_1(z-a) + \cdots \tag{20}$$

と表されますから，

$$(z-a)^n f(z) = a_{-n} + a_{-n+1}(z-a) + \cdots + a_{-1}(z-a)^{n-1} + a_0(z-a)^n + \cdots \tag{21}$$

という，べき級数が得られます。したがって，両辺を $(n-1)$ 回微分すると，

$$\frac{d^{n-1}}{dz^{n-1}}(z-a)^n f(z) = (n-1)!a_{-1} + \frac{n!}{1!}a_0(z-a) + \frac{(n+1)!}{2!}a_1(z-a)^2 + \cdots \tag{22}$$

となり，

$$\mathrm{Res}(a;f) = a_{-1} = \frac{1}{(n-1)!}\lim_{z\to a}\frac{d^{n-1}}{dz^{n-1}}(z-a)^n f(z) \tag{23}$$

が得られます。

また，閉曲線 C の内部で，関数 $f(z)$ が有限個の孤立特異点 $b_1, b_2, \ldots$ を除いて正則であるとします。このとき，$b_1, b_2, \ldots$ のそれぞれを囲み C の内部にある円周を正の向きに一周する経路を $C_1, C_2, \ldots$ とすると，これまでと同様の考えで，コーシーの積分定理により

$$\oint_C f(z)dz - \oint_{C_1} f(z)dz - \oint_{C_2} f(z)dz - \cdots = 0 \tag{24}$$

ですから，

$$\frac{1}{2\pi i}\oint_C f(z)dz = \mathrm{Res}(b_1;f) + \mathrm{Res}(b_2;f) + \cdots \tag{25}$$

がなりたちます。

留数と定積分

留数の考えを使って，図 3 に示す，幅 $2r$・高さ r の長方形の経路 C に沿った $f(z) = \dfrac{1}{z^4+1}$ の積分を考えます。

$$\frac{1}{z^4+1} = \frac{1}{(z-\frac{1+i}{\sqrt{2}})(z-\frac{-1+i}{\sqrt{2}})(z-\frac{-1-i}{\sqrt{2}})(z-\frac{1-i}{\sqrt{2}})} \tag{26}$$

ですから，4 つある $f(z)$ の孤立特異点 $\dfrac{1+i}{\sqrt{2}}, \dfrac{-1+i}{\sqrt{2}}, \dfrac{-1-i}{\sqrt{2}}, \dfrac{1-i}{\sqrt{2}}$ は，すべて 1 位の極です。

図 3 の経路 C の内部に入っている極は，$\dfrac{1+i}{\sqrt{2}}, \dfrac{-1+i}{\sqrt{2}}$ だけです。ここで，(23) 式より

$$\begin{aligned}\mathrm{Res}(\frac{1+i}{\sqrt{2}};f) &= \lim_{z\to\frac{1+i}{\sqrt{2}}}(z-\frac{1+i}{\sqrt{2}})f(z) \\ &= \frac{1}{(\frac{1+i}{\sqrt{2}}-\frac{-1+i}{\sqrt{2}})(\frac{1+i}{\sqrt{2}}-\frac{-1-i}{\sqrt{2}})(\frac{-1-i}{\sqrt{2}}-\frac{1-i}{\sqrt{2}})} \\ &= \frac{-1-i}{4\sqrt{2}}\end{aligned} \tag{27}$$

[4] こう言えるのは，ローラン級数が「一様収束」しているからです。詳細は略します。

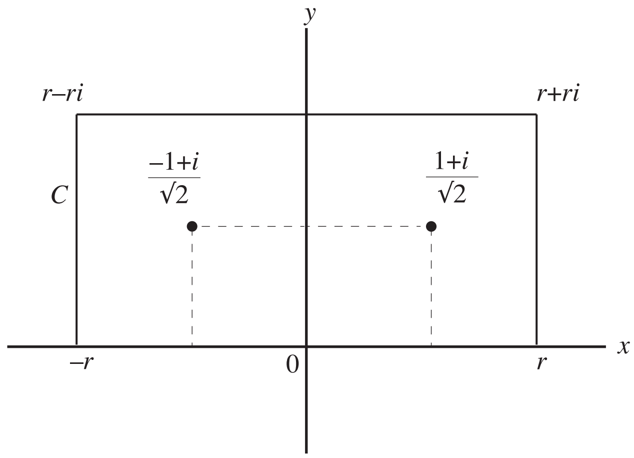

図 3: 留数と定積分

となり，同様に $\mathrm{Res}(\frac{-1+i}{\sqrt{2}};f)=\frac{1-i}{4\sqrt{2}}$ となります。

よって，(25) 式より，

$$\frac{1}{2\pi i}\oint_C f(z)dz=\mathrm{Res}(\frac{1+i}{\sqrt{2}};f)+\mathrm{Res}(\frac{-1+i}{\sqrt{2}};f)=-\frac{i}{2\sqrt{2}} \tag{28}$$

で，すなわち $\oint_C \frac{1}{z^4+1}dz=\frac{\pi}{\sqrt{2}}$ が得られます。

この考えを使って，実関数の積分 $\int_{-\infty}^{\infty}\frac{1}{x^4+1}dx$ を求めることを考えます。そのために，経路 C を各辺に分けて，それぞれの辺での $\frac{1}{z^4+1}$ の積分が，実軸上以外では $r\to 0$ のとき 0 になることを示します。これには，実軸以外の辺上では $|z|\geqq r$ であることを用います。

例えば，長方形の右側の立辺では

$$\begin{aligned}\left|\int_r^{r+ri}\frac{1}{z^4+1}dz\right| &\leqq \int_r^{r+ri}\frac{1}{|z|^4+1}d|z| \\ &\leqq \int_0^r \frac{1}{r^4+1}dy=\frac{r}{r^4+1}\end{aligned} \tag{29}$$

で，$r\to 0$ のとき 0 になります。他の辺でも同様で，$\int_{-\infty}^{\infty}\frac{1}{x^4+1}dx=\frac{\pi}{\sqrt{2}}$ が得られます。

参考文献

志賀浩二，複素数３０講，朝倉書店，1989. ISBN978-4-254-11481-2